

三島駅南口周辺開発 地下水対策検討委員会

第11回委員会

-第10回委員会の概要等について-

令和7年8月19日(火)

1. 第10回委員会(2025/1/31)の **主な質疑・応答の概要**

1. 第10回委員会における主な質疑・応答の概要

	質問等	応答、今後の対応等
(2)三島駅南口東街区市街地再開発事業の進捗状況等について	委員： <ul style="list-style-type: none"> 親杭横矢板壁の先端深度を地下水位が上回った場合、周辺の地下水はどのように流動するのか。 	応答： <ul style="list-style-type: none"> 基本的には迂回して流動する。親杭横矢板壁は、掘削部以深ではH鋼材のみが打ち込まれる構造となっている。地下水位がH鋼材の先端まで上昇した場合でも、その間を流れていくと考えられる。
	委員： <ul style="list-style-type: none"> 現場着工時の確認として、掘削完了後に床付け面にて平板載荷試験を実施し、地盤の許容支持力を確認すると記載があるが、確認した結果は。 	応答： <ul style="list-style-type: none"> 2025年1月16日に、まず1箇所試験を実施しており、十分な支持力を有することを確認した。今後、残りの箇所についても確認する。 対応： <ul style="list-style-type: none"> 平板載荷試験を行い、地盤の長期許容支持力は、設計地耐力より大きいことを確認した。結果は資料2「3. 構造検討に関する報告」に示す。
	委員： <ul style="list-style-type: none"> 地盤改良はどのようにして行うのか。 	応答： <ul style="list-style-type: none"> 埋土層に対して、固化材としてセメントを使用する。地下水の帯水層となる溶岩層に対しては行わないことから、環境影響は生じないと考えている。

1. 第10回委員会における主な質疑・応答の概要

	質問等	応答、今後の対応等
(2)三島駅南口東街区市街地再開発事業の進捗状況等について	委員: <ul style="list-style-type: none"> 設計における構造物の耐力はどの程度であるか。 	応答: <ul style="list-style-type: none"> 常時荷重に対する許容耐力は85t/m²程度、終局耐力は許容耐力の3倍程度で約260t/m²である。
	委員: <ul style="list-style-type: none"> 通水口は、工事が進むと見えなくなってしまうと思うので、その施工過程を市民にも開示できないか。 	応答: <ul style="list-style-type: none"> 市ホームページにおいて、施工状況の写真などを確認できるようにしていく。 対応: <ul style="list-style-type: none"> 市ホームページにおいて、地下水対策や施工状況の写真などを公開している。
	委員: <ul style="list-style-type: none"> 将来的に通水口が目詰まりする可能性があると思う。 	応答: <ul style="list-style-type: none"> 目詰まりが起きる可能性を最小限にする対策として、有孔管の周囲に碎石を設置する等、土木的な手法で対応する。
	委員長: <ul style="list-style-type: none"> 地下水は溶岩の隙間をじわじわと流動していて、パイプの中をスーッと流れているというわけではないので、仮にパイプの中に土が入ったとしても、自然科学的に言うとそれほど問題にはならない。 	対応: <ul style="list-style-type: none"> 有孔管の周囲に碎石を設置した。詳細は資料2「6. 地下水対策とその対応状況」に示す。
	委員: <ul style="list-style-type: none"> D棟が調整池となっているようだが、調整池と地下水位の高さ関係はどのようになっているか。 	応答: <ul style="list-style-type: none"> 現在は、B棟が調整池となっている。調整池の底面よりも地下水位の方が低い。

1. 第10回委員会における主な質疑・応答の概要

	質問等	応答、今後の対応等
(3)地下水調査結果	委員： <ul style="list-style-type: none"> 電気伝導度について、No.6は値が一定であるのに対して、No.7は値が上昇することもある。変動のパターンが少し違うことについて、考えられる原因はないか。 	応答： <ul style="list-style-type: none"> 現場で採水して測定した結果では、No.6もNo.7もほぼ同じ結果となっている。同形式の機械を設置しているが、機材ごとに測定の癖のようなものがあるようである。現場でも調整して測定している。 pH電極の内部液が流出する影響で、周囲の電気伝導度が上昇する可能性がある。また、No.6とNo.7の設置環境の違いも原因として考えられる。 一度計測機を入れ替えて設置したが、機材によらずNo.7では上昇傾向となった。
	委員長： <ul style="list-style-type: none"> もともと河川・湖沼や工場・養殖場で測定するために設計されたもののようなので、細かい水質の変動を捉えることは難しいのかもしれない。 現場で採水してポータブル計で測定した結果と合わせて確認することが大事だと考える。また、地下水が流動する中で測定しているので、流速の影響もあると考えられるが、その可能性は限りなく低いと思う。 No.6とNo.7の機器を入れ替えて計測してみてもどうか。 	

対応：

- イオン分析**によりNo.6とNo.7の地下水質に違いがないか確認した。また、No.6とNo.7の**機器を入れ替えて**計測を行った。詳細は資料3「2. 三島駅周辺地下水調査結果」に示す。